

令和6年9月1日

東亜大学大学院 総合学術研究科
研究科長 金田 晋 殿

人間科学専攻論文審査委員会
主査 永添 祥多

博士論文（甲）審査報告書

博士論文（甲）の審査を実施いたしましたので、下記のとおりご報告申し上げます。

記

- | | |
|------------|--|
| 1. 論文提出者 | 王 欽 |
| 2. 論文題目 | 山田洋次の映画に見る 1960～1990 年代の日本社会
－『男はつらいよ』の映像分析を中心として－ |
| 3. 論文審査委員会 | 主査 近畿大学教授、東亜大学大学院客員教授 永添 祥多
副査 東亜大学大学院教授 鶴澤 和宏
副査 東亜大学大学院准教授 伊藤まり子 |

<論文内容の要旨>

本学位請求論文は、日本を代表する映画監督である山田洋次の映画作品である『男はつらいよ』全48作品を対象として、実証的分析方法により、その学術的価値を解明した、極めて先駆的・独創的論考である。

本論文は2部構成からなっている。第Ⅰ部では、作家論や作品論にも踏み込んで考察し、山田洋次と『男はつらいよ』の世界を概観している。特に、山田洋次の自分史に遡って、山田映画の原点や、その映画作りと自身の原体験との影響関係を解明した。第Ⅱ部では、『男はつらいよ』シリーズにおける三つの要素「望郷」「恋」「旅」を考察することで、映画が映し出す1960～1990年代の日本社会の特質や変容を探り、山田洋次は「寅さん」映画を通じて何を訴えたかったのかを解明した。

第1章では、まず、山田洋次の経歴と人物像を主眼にする。山田の映画作品には「引揚者」というルーツによる作家性があり、その引き揚げ体験は、映画作りにもどのような影響を与え、

いかに山田の芸術観の根底を支えてきたのかを説明した。そのうえ、山田映画を全体的に見渡すと、テーマやロケ地がどのように変わろうとも、その大衆路線はデビュー当時から一貫して変わっていない。

山田監督は時代や社会を見つめる鋭い目を持っており、特に日本の下層階級や社会の周辺にいる人物（アウトサイダー）に注目し続けてきた。庶民の生活感覚を巧みに捉え、それを自分の芸術創作の基盤としている。映画監督として半世紀以上第一線で活躍する今でも、彼は相変わらず大衆の中にある喜怒哀楽を、その平凡な暮らしの中から見出し、そして作品化する。本章では、山田映画の特徴とその作品に一貫した世界観を明らかにした。

第2章では、『男はつらいよ』シリーズ誕生の背景や経緯を説明すると同時に、映画の基本構成（物語の筋立て、映画の構成パターン、主な登場人物）を明らかにした。映画の物語は、渥美清演じる車寅次郎が、故郷の葛飾・柴又のだんご屋「とらや」に帰ってきたことで起きる騒動や、日本各地を旅する中で出会う「マドンナ」たちとの恋愛模様を描き出す人情喜劇である。当初はテレビドラマ版最終回への抗議を受けての映画化という性質があったため、本来ならば、第1作で「一話完結」の予定だったが、大ヒットを記録したためにその後も継続する方向へと変わり、4半世紀のロングランを誇る国民的映画となった。本章では、主に『男はつらいよ』についての基本情報を解明した。

第3章では、本映画の魅力に着目する。『男はつらいよ』シリーズは、望郷（帰郷）一恋（失恋）一旅というワンパターンの物語である。通常の映画やテレビシリーズであれば、必ず避けるべきとされているのは“マンネリ化”である。しかし、『男はつらいよ』の世界では、むしろ良質の“マンネリズム”の展開が大衆の心を掴み、現在に至るまで幅広い世代において親しまれている。企画や製作の魅力以外に、そこには古くから日本人が慣れ親しんできた日本文芸における伝統的な物語形式が、巧みに仕込まれているからだと考えられる。

古来、日本の物語言説においては、しばしば貴種流離譚・道中記・美女遍歴・愚兄賢妹といった文学の「型」が用いられる。本シリーズは、こうした文学表現の類型を継承し、その洗練された様式美を生かしているのみならず、「寅さん」のヒットは、さらに一種の「文化現象・社会現象」として、当時日本の時代的背景と国民の社会心理にも深く根ざしているように思われる。「寅さん」は、架空の人物であるにもかかわらず、当時の日本人にとって、一つの愛すべき理想像として精神的な癒しの機能を備えているのである。

第4章では、高度経済成長期という大きな時代変化を背景に、都市化と工業化の波が地方まで影響を及ぼした流れに、故郷が奪われ、家族の絆が希薄していく、人間の生活基盤と思われた大切なものがやむをえず崩壊していくという日本社会の劇的変容について説明した。激動する戦後の日本社会に抵抗するように、「寅さん」シリーズで描かれている家族や故郷としての地域社会は、村落共同体の性質をもつ理想郷であり、古き良き日本の原風景ともいえる。

概していえば、東洋映画は西洋映画に比べて、望郷の念を強調しているため、「ふるさと」が聖なるものとされている。観客が「寅さん」映画に強く共感するのは、望郷のこころを満

たす基本的要素があり、多くの故郷喪失者となった日本人の心情に訴えるからに違いない。本章では、都市化の進展に伴う伝統的な郷土社会の解体、故郷だけでなく職場も生活も過剰に流動する時代変化の中で、山田洋次が描いた家族像や、故郷イメージとはどのようなものであるかを検討した。

第5章では、日本映画に見られる男女関係は、東アジア社会の伝統的恋愛観と純情、照れくさくて曖昧な男女関係や夫婦関係の伝統を受け継いだものとして、「恋の至極は忍ぶ恋」（『葉隠』）という言葉に表れているように、感情というものは内に押さえれば押さえ込むほど純粋になり強くなるといわれる。日本では、武士の時代から立派な男は、女を口説かないという儒教倫理観があり、『男はつらいよ』の主人公・車寅次郎は、「日本男児」の一典型であるから、「忍ぶ恋」を恋の最高ランクに位置づけて生きている。愛情表現に対しては寡黙で自分の感情を押さえる一方である。そういう日本男性の愛情表現における不器用な特徴は、山田洋次が諸作品の中で繰り返し追求してやまない中心的なテーマである。

したがって、「寅さん」と「マドンナ」の恋も本研究の着目点の一つとなる。寅次郎と愛の物語を紡いだマドンナたちは、生い立ちも性格も様々であるが、苦勞していて芯が強く、自立した女性、近代的自我の目覚めを感じさせる女性が多いので、近現代女性の変貌をたどりながら、「マドンナ」の女性像を明らかにした。「マドンナ」の女性像は、映画のバリエーションを確保する役目を果たすとともに、現実世界の女性の多様な生き方の投影として、昭和後期の「女性の縮図」といえよう。さらに、主人公の女性遍歴を辿りながら、その恋がいかなるものであったか及び本映画の恋愛観についても考察を試みた。

第6章では、「旅」は非日常的な移動であり、時空間の差異と同時に精神意識に大きな変化をもたらす。古典及び近現代の文学・メディア・宗教・芸術など、様々な領域にみられる「旅」の表象が数多く論じられてきた。元来、日本の大衆芸能史には「旅もの」の伝統が根強くあり、日本映画においても「股旅もの」というジャンルがある。本章では、流れ者の系譜に属している寅次郎は、日本における「旅」の長い歴史を背負っている人物として、その放浪生活とテキヤ社会の特質を明らかにした。

そして、映画が一般に人々にとっての「夢」や「理想」を表しているとするれば、「日常」と「非日常」の対立する意識構造がある。「旅」は本映画における重要な要素の一つとして、「非日常」的なこととされる。日常生活を送る我々は定住しながら放浪を夢見て、自由への憧れを主人公の「寅さん」に投影している。こうした「放浪」と「定着」の相互関係について分析する。さらに、寅の旅暮らしを支える「テキヤ」社会は、組織の掟が非常に重要視され、義理人情や侠気に富む世界である。古典芸能としての啖呵売やテキヤ社会の掟についても論じている。

終章では、主に本論文の全体の内容をまとめ、今後の課題を提示した。これまでの問題意識を基礎に、第1章から第6章まで整理・考察したものを踏まえた上で、一つの総括として結論を提示した。さらに、『男はつらいよ』シリーズも含めた山田映画は、現代の日本社会にどのような示唆を与えているのかを解明した。

要するに、グローバル化時代において、本研究の成果を今後の日本学研究及び映画を活用した日本語教育に活かすことが究極の目的である。また、本研究を通じて、日中における異文化理解、中国人の日本認識及び日中映画交流に、一つの指針を提示することを目指すものである。

<論文審査の結果の要旨>

令和6年8月5日13時～15時、主査・副査2名の審査委員と瀧田修一専攻主任の計4名で、王欽氏による学位請求論文に対する審査委員会を開催した。

まず、王氏による30分間の論文概要等の発表が行われた後、主査及び副査2名によって論文内容に関する質疑応答が約1時間行われた。

その際、出された主な意見としては、次の3点があった。

第一に、1960～1990年代という長期間にわたり、48作という大量な映画作品の映像分析を行っているが、対象時期を映画作品の内容変化に伴っていくつかに区分した方が、より分かりやすく、時代の変遷も明確化されたのではなかったかということである。

第二に、映画を題材として、1960～1990年代という日本社会が大きく変容した時代の様相を画像の綿密な分析によって解明している点は高く評価できるが、女性像の変遷や家父長制の影響等、当時の日本社会を巡る時代背景にもさらに踏み込んだ方が良かったのではないかということである。

第三に、本研究の学術的な独創性について、先行研究との比較において筆者はどのように位置づけているのかということである。

これらの質問に対して、王氏は的確な回答を行い、質問者の了解を得ることができた。

そののち、約30分間、合否判定を審査委員間で行い、本論文はその先駆性・独創性・学術的解明方法・学界への新しい知見提供等の観点から、審査委員会として「合格」と判定した。

令和6年8月18日13時から開催された博士論文公聴会では、論文構成の1部と2部との関連性、観客動員数が特に多い作品の理由、映像分析手法の客観性の問題などについての指摘があった。公聴会後の教員審議でも、博士論文としての学術的水準は十分に満たしているとの結論に達し、満場一致で学位授与が承認された。

※審査委員会の審査意見及び公聴会での意見に基づいて、本研究が博士学位の授与に足ると判断した理由の概略は以下の点である。

日本映画史上最長の約30年間にも及ぶロングラン映画の全48作品を、映像分析法や映像社会学の手法を用い、映画作品にとどまらず、山田の書簡、体験談、自叙伝等の膨大な資料を基に極めて実証的に分析しており、映像社会学の分野に新しい知見を提供するだけに

とどまらず、映像社会学の発展に寄与するところが極めて大きい点が高く評価される。

具体的には、第一に、山田映画には「引揚者」というルーツによる作家性が存在し、引き揚げ体験や戦争体験は山田の芸術観の根底を支えるものとして、映画作品に大きく影響していることを解明している。

第二に、『男はつらいよ』の作品内容要素を3区分(望郷・恋・旅)に分類しているが、この3分類に準拠した新しい分析手法によって綿密に考察している。このような分析の結果、山田は1960年から1990年代の日本社会の劇的な変容の意義を日本人に問いかけることが、本シリーズ創作の目的であったと結論づけている。

さらに、山田洋次の映画作品に対する従来の先行研究とは異なり、本研究の研究成果によって、『男はつらいよ』シリーズを社会学的研究対象としての位置にまで高めた点も高く評価される。王氏の研究により、映像社会学に新しい研究分野が確立されたと考える。

また、本研究は、外国人による日本研究の一環としての見地から捉える時、映画作品の有する研究領域としての潜在性を学界に広く認知させるという先駆性・独自性を有している。このため、本研究は、映画作品を通しての外国人による日本人論・日本社会論の試みであるといえる。

今後の課題としては、主に映画を媒介とした、中国における日本認識や日本文化理解へと今回の研究成果を発展させて行くことが期待される。

以上、審査委員の審査及び公聴会の結果から、本論文は博士(学術)の学位を授与するに値するものであると認める。

以上